

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 八木百合子

【所属】(助成決定時)

国立民族学博物館 外来研究員

【研究題目】

近代ペルーにおける「国家の自己像」構築過程に関する研究
— 聖地建設事業をめぐる歴史的な一次資料の解析を通じて —

【研究の目的】

本研究の目的は、近代ペルーの「国家の自己像」構築過程を、それに関わる多様なアクター間のまなざしや交渉過程を浮き彫りにしつつ明らかにすることにある。

19世紀初頭にスペインから独立を果たしたラテンアメリカ諸国の多くにとって、それぞれの歴史や国情に応じた独自の国民国家像の構築は、今日に至るまで国家的課題であり続けてきた。なかでも、先住民が人口の多数派を占めるペルーでは、独立後、白人やクリオーリョを中心に展開された国家像の構築は、20世紀初頭に入ると、先住民を積極的に取り込んだ国家像の構築へと大きく転換した。その背景には先住民を取り込んだ国民統合という政治的な関心が存在していたのは疑いもないが、以後、国家像の構築をめぐる国家的営為は錯綜した変遷を経てきた。しかしながら、マクロな視点から近代国民国家像の確立を描出しようとする従来の研究において、国民国家像の構築をめぐる錯綜関係、主体間のせめぎあいの様相は捨象されてきた。

そこで本研究では、「国家の自己像」構築の問題を徹視的な観点から精査し、多様なアクターの自文化に対するまなざしや交渉の諸相を浮き彫りにしながら多声的な「自己像」の構築過程を描き出すことにより、これまで描かれてきたいわば「オフィシャルな自己像」に対する認識に修正を加え、新たな視点を掘り起こすことを目指す。

【研究の内容・方法】

具体的な分析事例として本研究では、20世紀初頭に始まった国家の守護聖人サンタ・ロサの聖地建設事業を取り上げた。この聖地建設事業は、国家像をめぐるいわば「転換期」にあたる時代に繰り広げられ、一見、西欧キリスト教の聖地モデルの似姿をとりつつも、それが「国家の守護聖人」として象徴化されるに至って宗教的空間と政治的空間との接合領域としての性格を強く有するものとなった。つまり、この聖地には、「国家の自己像」構築の軌跡が文字通り刻みこまれているのである。

本研究では、まずペルーの首都リマにある古文書館(リマ大司教座古文書館)、図書館(国立図書館、カトリカ大学付属リバ・アグエロ研究所、ルイス・デ・モントヤ大学図書館)、ペルー建築学協会、教会関連施設を訪問し、この建設事業に関わる歴史的な一次資料の収集を行った。特に、資料に関しては、これまで手付かずであった、聖地建設事業に関わる見取り図や設計図、意見書、寄進および建設活動記録等を掘り起こすことで、事業主であるペルー政府やカトリック教会に限らず、建築家や都市計画家、資本家や都市起業家、そして一般大衆等に至る多様なアクターの関わりと実践の究明を行った。

以上の資料をもとに、聖地建設活動の展開を跡付けながら、それぞれの主体がいかなる意図や背景のもとにどのような国家像を描き出してきたか、その構築過程について分析を行った。また分析にあたっては、ペルーの近代史、教会史、建築史などの副次的資料を参考にしつつ、より広い視野からの考察を行った。

【結論・考察】

資料の収集・分析の結果、サンタ・ロサの聖地建設をめぐる、1910年から50年代までに、少なくとも4つの異なるプロジェクト(①1918～, ②1920～, ③1934～, ④1950)が打ち出されていたことが明らかになった。以上の資料をもとに、国民国家像の構築過程のミクロレベルに着眼したとき、そこには、西欧(白人)や先住民といった異なる主体間によるまなざしと交渉の複雑関係が浮かび上がってきた。そのうち①で建設事業の主体となったカトリック教会側は、当時ペルーで台頭したインディヘニスモ(先住民擁護運動)の流れを汲む発想、つまり先住民の文化や歴史を積極的に取り込んだ国家像を作り上げた。これに対し、②で聖地事業の主導権を握った政府側は、国家統合を志向しつつも、当時のヨーロッパを意識したより近代西欧主義的なイメージを追及した。他方、③では、民間人、とりわけ都市の新興ブルジョワ層が聖地建設に積極的に携わり、再び先住民のモチーフを取り入れた民族主義的な構想を打ち立てたものの、それに対する西欧主義者からの強い批判も見受けられ、国家イメージとして定着するには至らなかった。このように、20世紀前半は、当時の思潮を取り込みそれまでの排除されてきた先住民の文化要素を積極的に汲みこんだ新たな国家の自己像を構築が進む一方で、その過程には西欧主義者との軋轢、自己像をめぐる「揺れ」や「ずれ」、さらには主体間における交渉や調整が存在していた点が判明した。